

## ヨーロッパ旅行の思い出（回顧録）

どこかに行ってみたくてという夢が夏休みに実現した。定時制で教える自分にとって昼間は自分の部屋に閉じこもりがちになる。飽きると庭に出て石を投げたり、バットを振ったり、知らない人が見れば、あの人はいいい年をして毎日ぶらぶらしていて、まだ職につけないのだろうか、可哀そうに、と思うかもしれない。

このままでは、自分は駄目になってしまう、と思った。色々な計画を考えた。その一つが海外旅行である。ヨーロッパかエジプトに行きたいと思っていたところ、「2日間夏のヨーロッパ教養の旅」というのがあるのを知った。それは、ヨーロッパの主要都市を回り、英国に渡り、さらにエジプトまで行くというものであった。費用も信じられない位安かったので、「これだ」と思い申し込んだ。

7月31日（月）

出発当日。海外は今回で3回目。期待と不安が入り混じる。搭乗機はエジプト航空。3流の航空会社であると思うが、お金が安いので文句は言えない。ちゃんと飛べるのだろうか、案の定、2時間余り遅れて出発。不安がよぎる。

初めての成田空港。まだ見学者が入れないためがらんとしている。羽田に比べるとさすがに大きい。ハイジャック防止のため、警備が厳しく出発までに4回の検査があった。空港に入る前に1回、空港内で2回、搭乗前に1回であった。飛行機は、南回りで途中4回給油して、エジプト、カイロまで向かう。所要時間22時間、狭い席に座りっぱなしであるが、これでもかという具合に食事が出てくる。まるで檻に入れられた豚である。

カイロに着いたと思ったら、2時間の足どめ。待合室にはハエが飛び、猫が歩き回っている。カイロで飛行機を乗り換え、ギリシャ、アテネに着く。目の前にエーゲ海が広がる。眩しい。

アテネにて、またしても2時間近く足どめ。あちこちに目を見張る。それにしても外国女性のボリュームのあること。

アテネから最終到着地、イタリア、ローマ。やっとホテルで横になることができた。

8月2日（水）

ローマ市内見学。まずはカタコンブ、古代の人の地下墓地。何千何万というキリスト教徒の隠れ墓地である。地下数100m下まで掘り下げられた穴の両側の壁には布に包まれた死体が安置されていたと思われる等身大の窪みがずらっと並んでいる。不気味な光景である。まだ数千体の遺体が埋められているとのことである。

ローマは全てが遺跡。日本がまだ縄文、弥生と言った時代にローマでは高度に発達した文明が存在していた事実に圧倒される。

圧巻はバチカン市国、聖ピエトロ大寺院。言うまでもなくキリスト教の総本寺である。

イタリア人の、人の良さ、陽気さに圧倒された1日であった。

8月3日（木）

フィレンツェ午後自由見学。美術館でボッチチェリの「ヴィーナスの誕生」、「春」等の作品を見る。また「神曲」を書いたダンテの家を見学した。

夕食に食べたピザは直径30cm余り、全部は食べられなかった。

8月4日（金）

昨夜は暑くて、よく眠れなかった。蚊にも刺された。蚊はどこにもいるようである。

午後、ベニス見学。シェイクスピアの「ベニスの商人」の舞台となった水の都である。交通手段は、自動車ではなくゴンドラである。ベニスは毎年数センチずつ沈んでいる。そして数百年後には水の中に没するとのこと。

夜、またしても蚊の大群に襲われる。蚊取り線香を持ってくるべきであった。

8月5日（土）

オーストリア、インスブルックに向かう。途中、国境近くにて昼食。メニューを見ても分からない。食べ物が出てくるまで不安である。せっかく覚え始めたイタリア語も、ここではもうドイツ語である。お金もリラからシリングに変わる。

インスブルックは冬季オリンピックが開催された地、チロル地方の農村風景の美しさは世界一である。アルプスが目の前にそびえ、空気は冷たくおいしい。小川が道の脇を流れている。

8月6日（日）

ミュンヘンに向かう。ドイツに入ると町の様子ががらりと変わって整然としている。オリンピック競技場は広々とした公園の中であって、若者たちが池のほとりで野外コンサートを行っていた。ミュンヘンはビールの本場。苦味がなく実に口当たりがよかった。

8月7日（月）雨

ミュンヘンからスイス、チューリッヒまで9時間余りのバス移動。町並みがとても美しい。ヨーロッパの中でイタリアだけはどうも違うようである。イタリアでは軽自動車が主流であり、しかもかなりボコボコの車が多い。市内もゴミだらけである。

ヨーロッパでは、バイクはノーヘルであったが、自動車の運転手はきちんとシートベルトを締めている。バイクは「ヤマハ」「スズキ」の日本製である。

夜、間違えて高級レストランに入ってしまった。回りは背広にネクタイ、ドレス、どうも様子がおかしい。それなのにこちらはみすぼらしい服、ジーパン。翌日、日本人お断り、の張り紙が出たそうである。

8月8日（火）

アルプスのユングフラウ（3457m）に登る。天気は生憎の小雨。森と湖と山、素晴らしい自然に恵まれたスイス、その象徴であるアルプス山脈。

登山列車は、山の中をくり抜いた岩のトンネルの中を登っていく。雨も、途中から雪に変わり、頂上付近は猛吹雪になっていた。勿論、氷点下。そびえ立つアイガーの北壁、不気味な氷河。頂上では何も言えないが自然の脅威に驚くばかり。

8月9日（水）10日（木）

フランクフルト着、夜8：00。ドイツのフランクフルト自由見学。メインはゲーテの家、ゲーテが生まれ育った家には、彼の書いた実筆の本や部屋が当時のままで残っている。

8月11日（金）

旅も折り返し。オランダ、アムステルダムに向けて469km余りの大移動。広大なライン河を4年ぶりに見る。雨で増水したライン河は広く感じられる。4年前は大学4年生であった。古き良き時代の思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。車中は静まり返っている。自分も含めて、眠っている。ヨーロッパはバカンスのシーズン。キャンピングカーや荷物を一杯積んだ車が次から次へと追い越していく。

8月12日（土）

目が覚めるとアムステルダム到着。全くの単独行動。実によく歩いた。道に迷ったらどうしたらいいのかと思ひながらもひたすら歩き続けた。とにかく、市電の通っている所を歩いていけば、どこか人ごみに出ると思った。思った通り、中央駅にたどり着いた。東京駅の原型となった駅である。

アムステルダムは「運河」と「アンネ・フランクの家」が有名である。狭い入り口を登り、本棚の後ろの隠れ扉を抜けると、そこがアンネの隠れ部屋であった。壁にはアンネが貼った当時の女優の写真がそのままあった。こんな狭い部屋の中で、じっとナチから逃れるために戸外に出ることなしに大切な青春を過ごした日々を思うと、涙が浮かんでくる。戦争とは惨いものである。

美術館では、ゴッポ、レンブラントの作品を多数鑑賞した。

旅には、正確な地図とコンパスと運動靴が必要であると痛感した。

8月13日（日）

7時モーニングコール。しかし段々と目覚めが悪くなる。ベルギー、ブリュッセルに向かう。到着後、昼食。メニューはフランス語。さっぱり不明。頼んで来たのは知れない生肉。吐き気をもよおす。

午後、市内をひたすら歩く。メインは「小便小僧」。むかし、この国にあった宮殿から3歳の王子が行方不明になったが、3日後に裸で小便をしている所を発見されたのを記念して像が垂れ垂れたとのこと。

8月14日（月）

花の都、パリに到着。午後、さっそく地下鉄に乗ってシャンゼリゼまで行ってみる。地下鉄はどこまで乗っても、何回乗り換えても1.7F（80円位）。凱旋門の下に立ち、パリにいるのを実感。時間はもう夜の8時、なのに太陽はまだ西の空に赤々と輝いている。パリはこれから活気を帯びてくる。

8月15日（火）

パリ市内観光。聖母アリア祭のため、商店、銀行は休み。しかし、そのおかげでノートルダム寺院にて珍しいミサの風景を目にすることができた。パイプオルガンの荘厳な響きに合わせて歌われるハレルヤの大合唱、胸がキュッと引き締まる。

パリの人は実にのんびりしている。公園に一日中寝そべって本を読んだり、日光浴をしたり、平気で歌を歌ったり・・・

夕方、「さよならエマニエル夫人」を見たが、言葉も分からず実につまらない映画であった。

8月16日（水）

午前、ベルサイユ宮殿見学。まさに贅の限りをつくして建てられた、広大な敷地にそびえる壮大な宮殿。しかし何故か憎らしく思えてくる。それは、民衆の犠牲の上に建てられたものであり、マリー・アントワネットが処刑されることになったのは、自らが招いた天罰と言ってもよい。

午後は、ルーブル美術館の見学、入場料5フラン（250円）。まともに見たのでは3日かかるというものを、3時間で見学。この目で、「ミロのビーナス」、「モナリザ」、「晩鐘」、「民衆を率いる女神」等の作品を見られたのは幸せであった。

パリでは、男と女の世界。公園、電車内、至る所で熱い抱擁、口づけ。パリでは木々の葉も落ち始めている。

8月17日（木）

5時30分起床、ロンドンに向かう。船でドーバー海峡を渡り、列車にて霧の都ロンドンへ。しかし、今日はすがすがしい青空。スモッグも大分規制されて空もきれいになっているとか。ロンドンには大きな公園がいくつもあり芝生も一年中青々しているとのこと。

イギリスでは日本と同じ左側通行。しかし、車優先、人間などお構いなしに突撃してくる。手など上げて止まってくれない。横断歩道も少なく向こう側に渡るのは命がけである。車の大半は有名な二階建てバスと黒塗りの大きなタクシーである。

8月18日（金）

ロンドン市内観光。夕方はカイロに向かうため忙しい。ロンドン橋、ウエストミンスター寺院、中でも心に残ったのはバッキンガム宮殿の衛兵交代の様子。11時30分～12時までの交代を待ち構える観光客の中を、音楽隊と近衛兵が黒いトンがり帽に赤い制服を身にまとった宮殿から出てくる。感動！しかし毎日こんなちょっと無駄なことをしているのかと思うとおかしくもあった。

18時20分発の飛行機にてヒースロー空港よりエジプト、カイロに向けて出発。

8月19日（土）

午前2時30分カイロ着。実に不気味な町である。空港から出るや否や、ちょっとした詐欺にひっかかりそうになった。ホテルにて仮眠。8時起床、4時間余りの睡眠。

涼しいヨーロッパから猛暑の国へ。文明国から開発国へ。エジプトの印象は強烈であった。首都カイロでさえ、裸足で歩く人、汚い服を着ている人、ボロボロの家。現地人は我々に色々な手段で近づいてくる。気を緩めることはできない。

エジプト美術館見学後、待望のピラミッド、スフィンクス見学。生涯の内にこの世界遺産を見られることは夢のようであった。さらに、ギザのピラミッドの中まで入ることができた。細くて急な岩の坂道を、頭を抱えて50mあまり登っていくと、そこはピラミッドの中心、縦10m×横5m×高さ7mの玄室の中であり、石の柩が置かれてあった。中も蒸し暑かった。

そんなピラミッド見学も、バスを降りると現地人がやってきて、「ラクダに乗って写真を撮れ」とか「土産を買え」とか、手を引っ張ったり、行く手をさえぎったり強引に押し付けてくる。紙幣も手あかで汚れた皺だらけのもの。エジプトはイメージとは大分違う国であった。

8月20日（日）

帰国の日、またしてもエジプト航空、例によって出発が4時間遅れる。今回の旅で学んだことは、一つは「心のふれあい」である。言葉が通じなくても、人種は違っていても、心は通じるものである。こちらが笑顔で尋ねれば、相手も笑顔で答えてくれる。笑顔の何と素晴らしいことか。そしてみんな親切であった。それに対して、表情の乏しい日本人。表情を素直に表す外国人。楽しい時は、心から楽しく笑えるようになりたい。そして、どんなに苦しくても笑顔は失いたくない。

そして、もう一つ。エジプトという国を見て、自らの幸せを感じた。世の中には、まだまだ恵まれない人が沢山いる。文明社会に生まれた人間がエジプトのような後進国に住むのは容易なことではない。しかし、自分は贅沢な生活を送ろうとは思わない。質素な平凡な生活で十分である。それこそが最高の幸せである。

夕陽に染まった雲上の富士山が見えてきた。日本である。

昭和53年（1978）8月21日（月）21：00